



1980年(昭和55年)

10月号(No.424)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

- 来日したオデール氏と
喬加欽氏一行(片山全平)……(1)
中国登山友好代表団歓迎パーティ……(2)
チョモランマ登山隊報告会と
登頂隊員による講演会……(2)
東西南北……(6)
祥会 65年の記
岳の地蔵祭について
クリヤ谷吊橋の取り壊し
印度山岳財団の住所変更
図書紹介……(7)
「秘境ムスタン潜入記」「山菜記」
「東九州支部創立20周年記念誌」
「山へわが登高記」……(9)
お知らせ……(9)
第26回山スキー技術講習生募集
現地小集會他
報告……(9)
越後支部・婦人懇談会
会務報告・ルーム日誌・会員移動……(10)
図書受入報告(図書委員会)……(11)
カット/吉阪・山本・松本・芳野

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

来日した

アルパインクラブ

オデール氏と

中国登山協会

喬加欽氏一行

片山全平

チベット側からのチョモランマ登山にかかわる三国、英、中、日が九月八日、雨の上高地で初めて顔を合わせた。ほぼ半世紀におよぶ同峰登山の歴史のなかで、別々の歩みを続けた三国だけに、この予期されなかった一コマは、それなりの意義があった。八月二十四日来日していたノエル・オデール氏(オデールでないと同氏言明)、九月一日来日の喬加欽氏ら中国登山協会の六人、それに渡辺兵力氏ら当会チョモランマ隊の面々であった。

オ氏は七日午後、京都から斎藤惇生氏らに付き添われて上高地入りしたものの、八十九歳という高齢は雨で遠出もならず、宿舎五

千尺で、八日夕刻、東京・松本から上高地入りした中国の人たちを待ちこがれる風だった。

オ氏が白樺荘の日中合同の懇親会を訪れたのは午後六時すぎ。喬氏は、興奮気味のオ氏を、まさに襟を正して迎え、王富洲氏(一九六〇年の登頂者)の隣りにしつらえた座席に、慣れない身のこなしで、長身の体を置いた。オ氏は七八〇〇地点での酸素ボンベ発見の説明に関心を寄せたが、これについては「ソ連隊(一九五二年冬季)のものかも知れない」の疑念もあつて述べられた。来日早々の成田空港でも、マロリーの死体にまつわる質問に「南側(ネパール)に墜落したことも考えられ



歓迎レセプションで挨拶するオデール氏 撮影・宇津力雄会員

のころウエストンの日本に関する講演を聞いた」と、斎藤氏にもらしたとか、オ氏にとって上高地の二日間は大きな収穫だったに違いない。

来日した中国登山協会(喬加欽団長)同協会首席(喬加欽)は九月四日、日本体育協会で「中国登山界の現状と展望」の演題で史占春・同協会副主席から発表があり、そのあと質疑応答に入ったが、その主な内容を紹介する。

同国の登山史から述べ、アムネマチン第一峰の高度を六二八二と訂正した。北京地質学院が初登頂(一九六〇年)したのは

留守番電話(電話番号231-六六五九)
第二峰で、測量の技術的なミスから七一六〇になったという。従って第一峰は未踏峰であることを史氏は言明した。これはことし同協会が行った偵察から明らかにされたもので、アムネマチンは十八座の山群から構成されているという。

中国登山協会設立(一九五八年)の目的の一つとして、科学調査の推進があり、このため中国の登山隊は多人数で構成、また外国隊とのジョイントは不可能である旨、喬氏から説明があった。

開放八峰は発表通りだが、実際にはその周辺山城も含まれており、開放ピーク数は計三十座になる。そのなかには、チョモランマの隣峰、チャンツェ、シシャパンマ西峰のモラムンチュンをはじめ、ミニヤコング周辺の中山峰、嘉子峰(以上約七千)など、またアムネマチン山城十八座がある。

登山隊の許可申請は、チョモランマが一八八五年まで春秋、シシャパンマは八三年まで春秋、チャンツェは申し込みがなく、ミニヤコングは八二年まで、新疆省(ボグダ)が八二年、シシャパンマ西

山をきれいに「三」は持ち帰ろう

仲々歩けない天候の日でも荷を背負ってくれた。次の第6キャンプは八一〇〇メートルを予定したが、逆層のスラブに会い思うように高度がかせげず、予定より九〇メートルほど低い八一〇〇メートルにつくった。ここまではほぼ予定通りだったが、次のキャンプが問題だった。第7キャンプの予定地点は八五〇〇メートルから八六〇〇メートルの間だったが、予定より約三〇〇メートル低い八二五〇メートルの地点だった。

計画では七六〇〇メートルの第5キャンプまでは中国協力員が荷上げを行ってくれるので、ここを物資集積地とし、それ以上は隊員が行くということにしていた。第6キャンプは一八〇〇メートルをつくら、全員が一度ABCに下りて休養し、それから一気に第7キャンプを建設しながら頂上を目指すことにしていた。これを下に降りず上の方で時間をつぶし第7キャンプをつくったのでは、隊員が疲労し、日数もかかる。第6キャンプから上は人数の関係ですぐにラッシュをかけなければならぬ。



万里の長城/吉阪

東京からの気象予報、さらに気象係の横山隊員などの意見を参考に、天気の良い5月3日を登頂予定日とし、これを逆算して4月29日をABC出発の日と決めた。

第6キャンプから第7キャンプを建設する場合、北東稜の山腹に沿って右上方に進んでいくルートと、直上して主稜線に出て第1ステップを目指す、という二つのルートがあると考えられ、今回は山腹を右上方にトラバース気味に登っていくルートを選んだ。この場合の選択は、現場の責任者の加藤チーム・リーダーの「直上するルートも採り得るが、それにはフック・スド・ロープが必要であり、自分達には現在の手持ちもなく、また張る時間的余裕もない。従って右上

方トラバース・ルートを探る」という連絡でこれを了解した。こうして4月29日にABCを出発した。しかし天候があまり香ばしくなく、逆層のスラブには新雪が大部分積って、高度が仲々かせげない。雪崩の危険もあるといったわけで、八二五〇メートルに第7キャンプを張ることになった。最初の計画では第7キャンプに4人が入って一人一本ずつの酸素ボンベを背負い、8時間以内に頂上に攻撃するということがあったが、八二五〇メートルでは到底不可能だった。行動用の

酸素ボンベは距離的にみて一人二本は必要である。つまり4人は行けないということとで2人にしぼった。

最終キャンプが大変低いので一度ABCに撤退し直そうということも考えた。しかし七六〇〇メートルの物資集積地である第5キャンプでは、睡眠中に酸素を吸ったのだが、四人で一本の酸素ボンベの管が予定より吸いすぎて酸素が足りず、一度ABCへ下って空身で第5キャンプへ上がり、第5キャンプで態勢を整えるとの考えは不可能となった。ABCからの荷上げは、その時まで四十日程度、六五〇〇メートルに生活していた隊員の疲労の具合を考えると疑問だった。さらに、攻撃を遅らせれば大量の降雪が予想され、条件は増々悪くなる。一度撤退してしまったら登頂のチャンスはなくなってしまうだろうとの判断から、攻撃続行を決意した。こうして4人を2人にしぼり、一人で二本の酸素ボンベを持って、加藤隊員とテレビの中村隊員が出発した。中村隊員は連日行動して疲れが重なったのか調子が悪く、八七五〇メートル付近で大変遅れ、日のあるうち、酸素のあるうちに頂上へ行けそうにないと加藤隊員から連絡があり、加藤隊員の単独登頂にきりかえた。帰りの予想よりはるかに時間がかかり、加藤隊員は八七五〇メートルで、中村隊員は第2ステップの上でビバーク

ということになった。計画通り行って帰ってくれば成功かもしれない。しかし9人の隊員のうち6人が行くことを予定され、4人登れば成功と思っていたのが、結果的には加藤隊員1人と計画通りにはいかなかった。

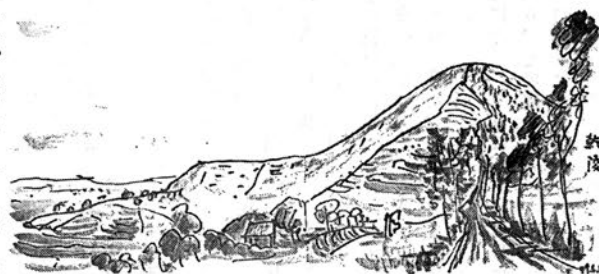
3月5日にベイスキャンプへ入ってから高度順化の期間をとるということで、キャンプ1に入るまでの約2週間、各人で計画を立て、キャンプ2へ行ったり付近の山に登ったりして体を馴らした。このことは結果的に非常に良かった。

今回はベイスキャンプまでをトラック、キャンプ1まではヤク、キャンプ1とキャンプ2の間で約4・2トンくらいを人力で荷上げをするということで、ベイスキャンプからキャラバンがスタートしたといえよう。従ってABCが実質的なベイスキャンプとなった。3月26日にABCができ、4月4日に六九〇〇メートルのキャンプ3、

4月18日に七七〇〇メートルのキャンプ4、22日に八二五〇メートルのキャンプ5の予定地に付き、さらにロープを8ピッチ伸ばし、八四五〇メートルのフィックスド・ロープを75本張り終ったところで、登頂態勢ができた」と判断した。4月29日に第1次隊、30日に第2次隊というかたちでアタック隊がABCをスタートした。

・宮下秀樹 副隊長の話

3月5日にベイスキャンプへ入ってから高度順化の期間をとるということで、キャンプ1に入るまでの約2週間、各人で計画を立て、キャンプ2へ行ったり付近の山に登ったりして体を馴らした。このことは結果的に非常に良かった。



西安・乾陵/吉阪

今回はベイスキャンプまでをトラック、キャンプ1まではヤク、キャンプ1とキャンプ2の間で約4・2トンくらいを人力で荷上げをするということで、ベイスキャンプからキャラバンがスタートしたといえよう。従ってABCが実質的なベイスキャンプとなった。3月26日にABCができ、4月4日に六九〇〇メートルのキャンプ3、

4月18日に七七〇〇メートルのキャンプ4、22日に八二五〇メートルのキャンプ5の予定地に付き、さらにロープを8ピッチ伸ばし、八四五〇メートルのフィックスド・ロープを75本張り終ったところで、登頂態勢ができた」と判断した。4月29日に第1次隊、30日に第2次隊というかたちでアタック隊がABCをスタートした。

北壁全体の感じは確かにネパール側の南西壁より傾斜はゆるいが、高度差はあり岩の部分は考えていた以上に悪かった。傾斜は平均で42度くらいと思われるが、ABCからキャンプ3までは所々60度くらい氷壁があった。これらの平均傾斜は45度くらいと思われる。キャンプ3からキャンプ4の間には浅いクローワールがあつて、ここには薄く雪がつき、傾斜はおおよそ35度くらいだった。しかしキャンプサイトが仲々みつからず、50メートルのロープが27本、27ピッチ目にやっとキャンプ3との高度差八〇〇メートルにキャンプ4ができた。だがこの間の荷上げは非常に困難で、4月4日から

4月18日に七七〇〇メートルのキャンプ4、22日に八二五〇メートルのキャンプ5の予定地に付き、さらにロープを8ピッチ伸ばし、八四五〇メートルのフィックスド・ロープを75本張り終ったところで、登頂態勢ができた」と判断した。4月29日に第1次隊、30日に第2次隊というかたちでアタック隊がABCをスタートした。

18日まで、キャンプを一つ伸ばすのに2週間かかり、ここが北壁での重要なポイントとなった。

この間、どうしても上に着かないので酸素を吸ったルート作戦を一度出してから着いた。その後の荷上げも仲々キャンプ4に着かず、前の晩に一分間一リットルの酸素を3人で吸わせ、これでは届くようになった。しかし状態が悪いと登りだけで13時間くらいかかった事もあり、調子のよい者でも6時間以上かかった。

キャンプ4からホーンバインの入口までがだいたい35度くらいの雪田で、この間が比較的楽といえは案で11ピッチだった。それからホーンバインのクローワールに入るのだが、写真だと非常に狭く、深く切れ込んでいるように見えるが実際にはそれほどでもなかった。

4月にはあまり雪が降らず、始めのうちはほとんど岩の露出している状態が多く、今回の場合想像できないほど悪い状態だったようだ。残置ハーケンにはホーンバイン隊と昨年春ここを下降したユーゴ隊の各1本ずつあっただけで、このホーンバインを抜けるのに我々は30本以上のハーケンを打たなければならなかった。何故難しくなっていたのかわからない。高さと相まってこの部分には非常に苦労させられた。

か、4月4日以降殆んど雪らしい降雪はなく、氷と岩ばかり登った。5月1日、アタックの前夜に6時間ほど本格的な雪が降り、この付近の積雪は5センチくらいになった。量が少なかったため雪崩に深い考えが及ばず、この点遺憾だった。



杭州・孤山より/吉阪

を持ち帰った。この件では多くの方々に迷惑をかけ、申し訳なく思っている。

その後、上の方には手つかずの食糧や酸素もあり、態勢を立て直し、5月7日第3次隊として重広

・尾崎両隊員にもう一度やってみようかと決めた。アタック隊は現地時間6時20分、日本時間で3時30分にキャンプ5を出発。2時間前

の最高到達点へ達し、それからはいよいよ6時間、難しき8時間あれば登頂出来ると考えていた。しかしこれは目算はずれで、上部は雪の状態が非常に悪く、コンティニユアスで歩けるところは全くなく、確保のピンを打つ場所を探すために雪を払いのけるのに時間が

かかり、今までの西稜隊の記録やユーゴ隊の報告では信じられないくらいで、ワンピッチ50分に1時間半もかかるという苦労をさせられた。

酸素が切れて約4時間、午後9時頃無事登頂を果たした。登頂のあと何となくキャンプ5まで帰れるかと思っていたが、夜1時過ぎ頃から帰りのルートを見失い、遂に2時半北東稜隊と同じように八六五〇メートルの所でビバークという

ことになった。ビバークでは殆んど支障も起こらず、翌日の夜12時半に無事ABCに帰着、そこで3時間眠って午前5時半に起き、ベリースキャンピングもまた夜に着くというように撤収だった。

もう少しうまく運ぶと思っていた山登りだったが、高く大きな山であることを改めて思い知らされた。隊員の一人一人が優れた感覚の持主であり、私が指示しなくても適切な行動をしてくれた。そのため登攀隊員10人だけでも何とかやれたのだと思う。

・重広恒夫隊員の話

宇部隊員の雪崩による遭難という事で、われわれの北壁登行という事は非常にむずかしい局面となった。みんながABCに集って色々協議した。物資はあと一回だけ、2人が頂上へ行けるだけの物資がキャンプ5まで上がっているという事で、もう一度だけのアタックを行うということが決定された。5月9日にキャンプ5に尾崎隊員と私が入り、その他の各キャンプにも我々の応援をしてくれる人々が入り、一応のアタック態勢がとれた。我々の第1次のときの失敗というのは、一つは朝の起床が遅くて高い所へ行けなかったという事があり、われわれは5月10日の朝は2時に起きた。そして色々の準備をしたが、非常に狭い空間で作業を行うので、また

我々の持っている能力が八〇〇〇メートルになると行動力の面でも、思考力の面でも半減してしまうので、4時間くらいかかって食事をしたり、装備をつけるということになった。そして6時すぎにキャンプ5を出発して、八六〇〇メートルまでは前に張っておいたフィックス・ザイルがあったので、比較的速い時間で最高到達点まで達することができた。その時点では、この調子だと午後3時4時には頂上に立てるのではないかと思っていたが、自然の条件はきびしく、我々の行動は遅々として進まず、西稜にたどりついたのは夕方4時ごろだった。ルートはそこからもさらにきびしく、我々の持っていた酸素も夕方5時にはなくなってきた。このことが頂上へ行くか、下るかという一つの判断材料になるわけだが、我々は酸素がなくなってきたことを別に気にしなかったし、またなくなることには気づかなかった点もあって頂上へ向かうことにした。そしてさらに登って、夕方9時頃、日本時間なら7時すぎの日没寸前にチョモランマの頂上に達した。山登りは頂上に立つのは容易かもしれないが、そこからヘリコプターなりでベースキャンプへ運んでもらえるならよいが、我々はさらに下まで降りなければならぬ。夕方9時に頂上へ着いたので、すでに下降の時間は闇の中となり、途中でルートを

失い、八六五〇に到着の着のま、ザックに座ってうずくまり、パークして朝を迎えた。朝7時頃になると空が白んで、我々のルートを下に見つけることができ、その夜12時半に六五〇のABCへ下った。

加藤保男隊員の話

前回の頂上攻撃の前の日は連日吹き続けた風が夜中からやんでおり、うとうとしながら耳をすますのだが仲々風が吹かない。そして8時になって始めて『よし』という感じになった。この時上のキャンプにいた全員が



西安・華清池/吉阪

そう思っていたに違いない。田中ドクターが『天、我に味方せり』と叫んだ。すぐ七五〇〇のキャンプに上がる。その時にはサウス・コルにテントが張ってなかったで、翌日サウス・コルにテントを張り、そこから一気に頂上を目指した。かなり無理があったが、かろうじて登頂することができた。着いた時間は4時半で、日が暮れる寸前だった。今回のチョモランマ登頂にくらべて、余裕があったのか、天気も良く、周りの

景色も見ることができ、初めて持ち上げた16ミリのカメラも頂上で回した。頂上ですでに酸素がなくなり高度障害で目がよく見えなくなっていた。目の前が暗くなってきたが、自分では時間が4時半を過ぎ日も沈みかけていたから暗くなったのだと思っていた。酸素を吸わなかったため障害が出てきたのだった。意識は急速にもうろうろとしてきた。南峰のピークからは懐中電灯をつけなければ歩けなかった。そこからはザイルをはずして下降した。石黒氏は酸素を吸っていたし馬力もあったが、懐中電

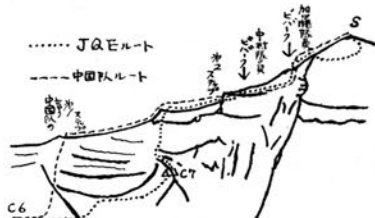
灯を落してしまっていたので、私はすでに目が見えない状態であったが、懐中電灯をつけて先へ歩き出そうとした。が全然見えない。アイゼンの跡も見えないし、かまないと自分のトレースさえ見えない。そこで石黒氏に先へ歩いてもらった。私は後をついてきたのだがついて歩くのが精一杯だった。そのうちに距離が離れる。10分くらいでもそこまで行くのがやっとで、苦しめて雪面に顔をつけて息をついでいた。また距離があく。どのくらい歩いたのかわからないが、真暗闇の前

方に幻覚で、八五〇〇の最終キャンプの残がいを見た。そしてスリッパし、始めて自分が危険なことをしていると気がついた。その晩は八六〇〇に付近でビークし、次の日にかろうじて帰ってきた。この日の気温はマイナス45度。風はかなり強かった。こういった中でかろうじて生還できたことが、自分にエベレストへ登ったという自信を与え、今回の役に立った。

今回の場合も最終的には土壇場の状態で頂上に立ったわけだが、それは過去に中国隊が登っている、中国人が登っているのだから、とルートを甘くみたように思う。第7キャンプについていうと、中国人の言う第1ステップはオデル氏の言うのと違っているようだ。八一〇〇あたりから二つステップが見える。第2ステップというのははっきりわかるが、その手前の第1ステップはどれなのかわからない。トランシーバーで下に問い合せてもわからない。結局、中国隊がいう第1ステップよりも一段上を目指してどんどん登っていったら、今回自分達がつたようなルートになった。八〇〇〇と八六〇〇については未知のルートを登っていると思う。しかしまるっきり未知のルートというわけでもなく、英国隊も同じところを登っているとも考えられる。ほぼ目で見て登れそうなどこ

ろと言え、そこが一番適しているように思えた。中国隊の報告書では、この辺には岩が露出していて、雪はまったくないのだが、われわれの場合は前の日にかなり雪が降って、新雪が逆層の面についており、非常に登りづらかった。八六〇〇に最終テントを建てる予定が、八二五〇にテントを張ることしかできなかった。そこから頂上に行くにはアタック隊4人では無理で、急ぎよ2人がサポートに回り、自分と中村カメラマンが頂上へ向かった。中村隊員の調子は途中からかなりくずれ、私もかなり気にしていた。頂上へ立てるか否かのぎりぎりのところまで待とうと思った。第2ステップの五〇〇ばかり上の八七五〇に下るの所で下のキャンプと交信した。中村隊員にはその時まで何回となく調子はどうか、酸素ボンベが壊れていないかなど聞いたが、その都度大丈夫という返事が返ってきた。気力も根性もある中村隊員なので大丈夫と思っていたのだが、しまいいには大丈夫という返事はあっても体が前へ出なくなった。足が動かない。これで頂上に立つことは絶対不可能だと判断し、そしてその

場所が安全なところでもあり、そこに残していても大丈夫だったので、自分一人なら明るいうちに何とか頂上へ立てるだろう、とロープをはずし上へ行くことになった。その時なぜそんな時間に一人でチョモランマの頂上に向かって行くことができたかと言えば、矢張り先ほど話した八六〇〇のビークが自分の支えとなった。あの時の条件とくらべ今回の条件は良かった。ズボン下とスキーズボンだけで頂上へ行けるくらい気温も上がっていた。北壁隊の尾崎隊員は頂上へ向かう時、北東稜隊が八七五〇でビークをしていてるのだからと連絡してきたことからすると、このことが間接的に北壁隊成功の支えにもなり得たと思



う。ただこの連絡を聞いた私は、それからの彼らのことが気になって、はじめて下で気をもむ者の気持がわかった。結局私が頂上へ着いたのは北京時間の9時5分前、日本時間の6時25分くらいに感じた。日が沈む寸前で、カメラのシャッターがかろうじておけるという状態だった。頂上へ着いたらあれもこれも写真に収めようとカメ

場所が安全なところでもあり、そこに残していても大丈夫だったので、自分一人なら明るいうちに何とか頂上へ立てるだろう、とロープをはずし上へ行くことになった。その時なぜそんな時間に一人でチョモランマの頂上に向かって行くことができたかと言えば、矢張り先ほど話した八六〇〇のビークが自分の支えとなった。あの時の条件とくらべ今回の条件は良かった。ズボン下とスキーズボンだけで頂上へ行けるくらい気温も上がっていた。北壁隊の尾崎隊員は頂上へ向かう時、北東稜隊が八七五〇でビークをしていてるのだからと連絡してきたことからすると、このことが間接的に北壁隊成功の支えにもなり得たと思

ラは2台、8mmカメラ1台、フィルムは13本も持っていた。気持は一秒でも早くそこへ着いて、明るうちに写真を撮りたかった。一九七三年に頂上に立った時は、もう登るところがなくなり頂上についていたとわかったが、今回は中国



梓会六十五年の記

茶谷東海

今年は梓会創立六十五周年に当たる。築地の海軍経理学校の英語教授であった田部重治先生が同校に山岳部を創設したのは大正五年であった。その時の生徒現存者は等松農夫蔵前日本公認会計士会長唯一人である。その年の夏、先生は生徒二十名を連れて徳本峠を越えて上高地に入り槍を往復したが、その時梓川の清冽に心を打たれた生徒の提案で山岳部を梓会と命名した。以後毎夏北アルプスや富士に登るのを例とした。筆者も大正十一年は霞沢と乗鞍に、十二年には燕、大天井、槍へと喜作新道(その春に開通した)に登った。昭和十年筆者が教官のとき梓会初めての槍・穂高縦走を決行し

隊が頂上に建てた観測用ポールがかなり手前から見え、何度も頂上を見上げてはうんざりした。そして撮れた写真はお化けのような自分の写真など数枚だけだった。

(文責・岡沢)

たが、その計画を指導されたのが法政大学山岳部長でもあった先生と法政大学生であった(と記憶する)角田吉夫氏であった。

敗戦で会は自主解散したが、昭和三十七年筆者らが世話人となって復活し、田部先生を名誉会長に推した。この時、会の性格を一変し、不特定有志の山を楽しむ会とし、その後は概ね五十人ないし百人くらいで奥秩父、奥多摩、奥武蔵や伊豆・箱根の山や丘陵を歩いた。また時には一、二泊で徳本・西穂、谷川岳、蔵王にも登ったことがある。

復活の際は、特に日高信六郎、松方三郎、朝井一男、川上隆、安彦六郎の諸氏に応援していただいた。改めて謝意を表する。

六十五周年の記念としては、思ひ出懇談会、会則の制定、記念ハイキング、小冊子の発行などを予定した。

◎思ひ出懇談会

八月十日(日)正午水交会において、瓜生卓造、川上隆、成瀬岩雄、村井米子、湯山芳太郎、脇坂雄治(田部先生の令弟)の六氏が

来賓を迎え、六十五名が参集して三時間にわたって田部先生の足あと、梓会創立時の思ひ出、六十五年間の歩み、会の現況を愉快に語りあった。この日、田部先生の雲取のレリーフ建設に功績のあった柿原謙一氏(前秩父電鉄社長)は、先生が大正四年木暮理太郎氏と登った毛勝山頂に立って、遙かにありし日の先生を偲ばれた由である。

◎会則の制定

今までは筆者らの覚書によって運営してきたが、会員が二百人を超え会則がほしいとの声が出てきたので、八月十日滝本義雅千葉県公認会計士会長に議長をお願いして極く簡単な会則を作った。簡素は先生の遺志でもあった。問題になったのは事故発生時の責任であったが、会則では会は如何なる場合も責任を負わないことを明示した。しかしリーダーの重大な過失があった場合はこれではすまされなと思っています。山の先輩のご教示を乞いたい。

◎記念ハイキング

次のようなコースの中から希望の多いものを選び来年実施を考えている。

アルペンルート立山、出羽三山、八丈富士、三原山、木曽駒、北八横岳、大峰大台原大杉谷。富士中道巡りは落石事故に鑑み敬遠する。よいコースがあればお知らせ願いたい。

◎小冊子の発行

梓会の歴史を作る予定もあるが、この際は思ひ出懇談会の記録程度の簡素なものにする。しかしもし投稿下さる方があれば一人四百字程度で特別寄稿として掲載させていただきます。

終りに現主要役員を付記して今後とも日本山岳会諸兄のご指導を仰ぐ次第である。

会長 茶谷東海 副会長(山行) 日野虎雄(綜合) 東海林正治(総務) 佐藤宗全 幹事(庶務) 柿原悟朗(会計) 高橋正吉

岳の地蔵祭について

北アルプス上高地の八右衛門沢から山岳遭難者の碑などが撤去、移転されたのは昭和43年だが、それ以降この跡地からは雨が降ったりすると拾い残された遺骨が多数現われ、地元有志の上条武氏や、上条岳人、上条輝夫両会員、高山元信濃支部長など関係者は当時の松本市長らに協力を求め、この遺骨を松本市中山区の中山霊園の一角に納め、その供養を毎年行っている。今年はその十三回目に当り、関係者で小さな地蔵を建立した。

クリヤ谷

吊橋の取り壊し

神岡営林署長よりクリヤ谷登山道(笠ヶ岳―槍見温泉区間)に架設されていた吊橋は老朽化のため

取り壊す(七月中) 旨本会へも通知があり、笠ヶ岳方面への登山は笠新道を利用するよう要望があった。

インド山岳財団の住所変更

新しく住所が左記のように変更した。(海外連絡委員会)

INDIAN MOUNTAINEERING FOUNDATION, NEAR RAM LAL ANAND COLLEGE, ANAND NIKETAN ROAD, NEW DELHI-110 021



地球は、何回飛んでも新しい。



日本航空

今年もまた上高地山研で逢いましょうー

図書



紹介

秘境ムスタン潜入記

高橋 照 著

一九七七年、著者は長い間狙っていた禁断の王国ムスタン潜入を果たした。本書はその紀行である。こうした行動に批判的な人があるかも知れないが、古来紀行はこの類のものが最も面白い。許可を得た入国と異り、何が出てくるか分からないからである。

まえがきによれば、著者の目的は全くの個人旅行で、これが引き金になったか否か判らないが、ネパールでは危険地域へのグルーブ旅行を認めようとする空気が出はじめたという。そうならば著者の旅行は先鞭をつけたことになる。

著者はネパール語をよくし、国情の動きから風俗、習慣、民話に

到るまで勉強していて、例えば種族雑多で有名な国なのに、ひと目で氏族カーストを判断できる。ポーター雇傭などに役立っており、紀行に前記の豊富な知識が駆使されているので、読んでいてすこしも飽きない。

叙述はムスタンの峠に立って、今までに変わる、開けた緑の高原の中に王城を眺めた感激を冒頭に置き、次にボカラからの旅行を描くという映画展の展開である。

著者は下調べや根廻しのために、何回もタックコラの道を歩いた。本書には途中の村々を見取図が挿入され、パッティヤやチョルテンまで克明に載っていて、一緒



タンボチェよりのエベレスト山本

に旅している気分になる。私は、ポーターのマイラーやブッデー、パードルもそうだが、自分が訪れた城郭都市ティニーが懐しかった。

著者はここで隊商の仲間に入り

いよいよ本番となる。チェックポイントのあるカクベニを避けて、カリカンダキの右岸に入る。そして王城に入る前のチェックポストとのやりとりや、王城のことや、帰りの旅のことなども興味深い。

著者はまた途中の事物をよく視ている。灌漑水路の水圧調整器を正確なスケッチで説明したり、大岩壁に添って設けられた水路を断面図で表したり、また煙に作られているものや脱穀の様子を写真に写したりして、ムスタンを紹介している。

口絵にムスタン王城や王侯夫妻の写真があり、見返しに王城見取図と旅程地図があり要を得ている。異色ある紀行書である。

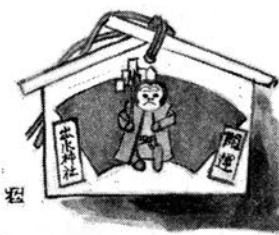
東京新聞出版局 昭和五十四年十月刊 四六判 一四〇〇円 (川崎精雄)

山 菜 譜

片岡 博 著

昭和五十二年の春から朝日新聞に随時連載されたものを加筆して出されたもので、今まで多く出版されている山菜の本とは異色の内容をもっている。

全く順不同であるが、それぞれ



自然の味というひとつのつながりのあるものばかりで、とはじめにことわってあるが、一つの山菜を二頁にわたって綴っている。

上欄には山菜の紹介は勿論、その山菜とのいろいろな出会い、子供の頃の思い出、ものがたり、民謡にまつわる話、学生歌、俳句、

はたまた外国にまでおよんでワシントン「のびる」を味った人の話、古典にまで触れていて、一つの山菜を多方面からつないでいたのしい読物でもある。

下欄には四つの項目を設けてあり、①食べるにいい時期。緯度から高度までいろいろ違っているの

で確認できているものは「何処何処ではいつ頃」と精しい。②採れるところ。著者がみつけたもの、文献などでわかりやすく教えてくれている。③食べ方。できるだけ味わう上でのポイントを取り上げてくれている。最後に、④ひとこと。ここでは科名、別名、特徴など、例えば山椒の欄では「摘んで芽を使うときは先ず両手の掌でパ

チン! と叩いて使うと香りがいい」とひとこと教えてくれている。

山菜欄とは別に「雪国の春」、「山菜採りのマナー」、「山菜と薬効」等々、九つの山菜によせた随筆が随所にいれてある。

山菜についてより詳しくしらべつける著者のひたむきな情熱が窺える。

山に、生活に、歴史に、文学に、趣味につながっていて、読物としても豊かな内容で一杯である。

さし絵は新潟県加茂市在住の植物研究家の坪谷富男氏によるもので、無条件に正確、かつ鮮明に画かれている。そして全国に目盛をつけた◎マークの寸法標示をされている。

写真は著者によるものでさし絵と同じ頁にあり一層わかりやすく出来ている。

山菜ブームのなかで山菜にもこんな態度で接しなければと考えさせられる本である。

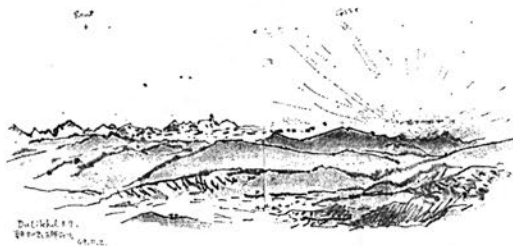
昭和五十五年四月十五日発行
坪谷富男イラスト 実業之日本社 B 六版 七八〇円 (斎藤 桂)

東九州支部創立
二十周年記念誌

東九州支部編

本会東九州支部が発足して、今年が二十周年となる。初代支部長故永井清一さんは基礎作りの時代、現支部長野口秋人さんは二代目ということである。歩みは地味であるが着実に、支部の在り方として、よく地域の特色を生かした運営に当られ、今般「東九州支部創立二十周年記念誌」が発刊される運びとなった。記念行事としての山行は「九重山群を巡る」として既に五月に実施され、「記念講演と映画の会」は十一月に予定されている。

記念誌は先ず記念アビールとして「自然保護運動を前進させよう」を採り上げて、自然の調和を傷つけることは環境悪化を伴い、やがて人類の破滅に直面すると警告を発し、支部の姿勢を示している。「支部の歩み」では支部設立に努力された会員の足跡が詳細に紹介され、支部設立の母体となつた二豊山岳会のことなどは、この記録に残されなかったら永久に忘れ去られるところだったと思う。東京から仕事の都合で移住された松田雄一さん夫妻が、地元に残り込んで地元会員の方々と協力し



カトマンズの東 Dulikhel より日の出を拝む／吉阪

て運営に当っており、本来の日本山岳会の会員の在り方を示す様子が知り得て嬉しく思えた。

「会員随想」では十一名の会員が各人の追憶、山のかかり合いなどについて筆を執っている。

「富士百名山考」や「大分の山名あれこれ」も面白い読物であった。各支部でも機会があればその地方の山々を拾い上げて、本会でそれを集大成したらと思つた。

となく忘れ勝ちななる物故会員の追悼には五人の方々が名を連ねていたが、先人の山に対する考え方など改めて知ることが出来た。

「支部員の参加した海外登山年表」や資料「一〇〇山の選定にあたって」等、大分県における山名のみならず山のあれこれを知り得て愉しかった。

昭和五十五年五月十日発行 A4版 八十一頁 頒価 一二〇〇円 千一六〇円 申込 東九州支部事務局または本会事務局 (折井健一)

山へ 一わが登高記一

吉沢 一郎 著

名誉会員吉沢一郎氏の自伝的回想である。冒頭にバルトロ氷河のBCで過ごした日記がかかれてあるが、七十三歳で五二〇〇mの高所に三週間も起居した経験は極めて珍らしいものだけに、読者の興味をひく。

特に著者が昔、ハウストンのK2登山を紹介して自らK2に強い関心を覚えて以来、約半世紀の後に、この巨峰にまみえることのできた感動が率直に語られている。

次章の「予科に入るまで」からは、年代を追って書かれている。少年時代を巧みに綴った「わが悪童時代」はなかなか面白い。ついで「東京商大山岳部」と「谷を歩く」がつづき、山岳部草創期のころから、登山にあけくれた学生時代、剣岳東大谷初登攀、日本山岳会の人びと、伊奈川週行が語られる。「静かなる山々」では戦争直前の山歩きや「山日記」の編集を述べている。

著者は一九六一年一橋山岳会のアンデス登山に隊長として参加したが、その時のことが「アンデス」の章である。全部で十七座の

山へ登ったが、そのうち初登頂十、第二登五、第三登二という成果をおさめたのは、著者のそれまでの研究に拠るところ大であった。そればかりでなく当時五十八歳であった著者は、カカワイチヨ(五四五〇m)の初登頂とウエラカヨック(五八三六m)の新ルートによる第二登を果たしている。

この登山以降、海外の山岳人との文通が次第に深まったようだ。それらの友人を訪ねたのが次の「地球一周の山旅」である。一九六八年九月半から十一月月上旬までの五十日間わたる旅であった。

先ずオーストリア山岳会、ドイツ山岳会を訪ね、独逸ではG・グルーバー、A・ディームベルガー、H・ハーフナー、H・ブル夫人、G・ハウザー、A・リンスパウワー、M・レビッチ、E・ヴァーニス、W・フレイ等に会い、ロンドンに飛んでUIAA総会に日本山岳会代表として出席、ハント卿はじめ各国代表者と交歓、ノースウエールズのエクスカスカに参加、ジョー・ブラウン、A・ブラックショーに会い、古書店ガストンを訪ねる。スペインではフェリス・メンデス山岳連盟会長ら



に会い、アメリカに渡ってから、山岳会長のN・クリンチ、A・カーター、W・アンソルド、F・ウィースナー、J・マツカーシー、フアーカール、W・シリ、オーテンバーガー、エチュパリア、D・エマーソン、ビート・シーニング、トム・ホーン、パイレン、ジム・ウィッテカーらに会い、カナダ山岳会ではパディ・シヤーマン、フィリス・マンデー女史に会っている。

「私が文通していた外国の山男たちは、皆親切で、心から私を迎えてくれた。この恩返しはいづれ出来るかわからない。中にはもうあの世へいってしまった人もいいる。それにしても私ほど幸運な星の下に生れた人間はまずいまい」と結んでいるが、この著者ならではの、おそらく誰にも真似のできないユニークな旅であったと思わざるを得ない。私が最も興味深く読んだ一章である。

著者は一九七七年のK2のあと、十月に再度UIAA総会出席のためメキシコに行き、帰途アメリカに寄って、クリンチらとの旧交をあたため、十一月には日本山岳会の名誉会員に推挙された。そして一九七九年夏には笠ヶ岳に登ったが、それが「七十六歳の笠ヶ

お知らせ

・第26回山スキー

技術講習生募集

これから本格的に積雪期のスキー登山を志す方を対象にしたスキー技術講習会を企画致しました。

春の安定した天候のもとに、山スキーの基礎技術から始め、飯豊の二王子岳のスキー登山を行います。

講習会は各参加者の山歴とスキーの経験や希望に従って班編成をし、講師にはヒマラヤ等の海外登山の体験者で山スキーの経験豊富な者を予定しています。

懇親の意味を含めての講習会ですので、男女を問わず多数参加していただきたく、ご案内申し上げます。

日程 昭和56年3月20日(金)～22日(日)

場所 飯豊連峰 二王子岳(一四二一m)を中心とした春山スキー登山。

行程 3月19日(木)夜行で出発

3月20日(金)新発田駅前集合、バスにて南俣、スキーにて一王子の小屋に入る。午後基礎技術練習、夕食後ミーティング
3月21日(土)二王子岳の分散スキー登山、夕食後懇談会

3月22日(日)午前中スキー練習、午後下山(現地解散)

費用 一人 一五〇〇円(宿泊・保険等費用を含む)

交通費、食費は各自負担

申し込み方法 日本山岳会事務局で電話にて受付けます(二六一一四四三三) 電話受付後申込み書を送付します。早めにお願います。

参加者説明会および準備会 昭和56年3月6日(金) 山岳会ルーム

主催 指導・遭難対策委員会 共催 新潟支部

・現地小集会

集会委員会

場所 三倉、大倉山
期日 11月23日～24日

全員東京から車で出発。会津田島を通り、野原新田の分教場で泊まる。

所要時間 5時間

整備 寝袋と24日の昼食
費用 七千円(23日夕食、親睦会。24日朝食と交通費まで)

申込先 山岳会事務局
支部長会議と
現地小集会

11月20日～24日。詳細は前月号会報を見て下さい(関西支部)

お知らせ

岳行」として最後におかれてい

「山に入ってから六十年、それ一筋に生きてきたお蔭で、会社をやめて一度にガククリとは来ず、相変らず同じことの繰返しをやりながら、いつも若い人たちと同じように、気持の上では前向きの姿勢でいられるのである。こんな贅沢で有難いことはない。山男が充実した生活をいつまでも続けようと思うなら、まず健康な身体、可能な限りの規則正しい生活、そしてよき山、よき友、よき書物、最後に持続的な幅広い好奇心が必要である」と、著者は「あとがき」に述べている。

山登りと山の探究に過ごした、稀有な人生の、偽りない記録として貴重である。著者の息吹きが伝わってくるようなザックパランな表現は、いかにも吉沢さんらしい。

なお巻末に年譜・山とスキーの記録・日本山岳会、海外関係・著書、訳書、監修書の一覧表がある。写真は巻頭に、K2のBCで撮ったポートレート一枚。白旗史朗氏のカラー写真を使ったカバーは非常に好いと思った。

B6判 三二六ページ 一九八〇年八月二五日(株)文芸春秋刊 定価一六〇〇円(望月達夫)

会費を納めて下さい



懇親会にて 撮影・本望英紀会員

きれず今回のように膨らんでしまった。講演会のあとで会長はお疲れのはずであったが、事情をお話して私たちの方でも講演をお願いした。

日本山岳会のあり方と今後の行き方、またチョモランマ登頂にまつわるエピソードのようなもの、その他大変有意義なお話を聞かせて頂き参加者一同大変感銘を受けた。

そのあとの懇親会では杯を重ねるごとに談論風発で話に花が咲き、賑やかなうちに時は流れていった。

報告

西堀会長を囲んで話を聞く集い

越後支部

十四、五名くらいが集って勝手な熱を上げようと軽い気持で考えて、新潟在住の有志数名に回状したところ、あちこちで聞きつけて多数の参加者となり、集会は盛大を極めた。

会長は新潟県中蒲原郡亀田町(新潟市の隣接町)に日本生産性本部からの講師として来られた。折角新潟へ行くのだから会員諸氏と歓談したいとの意向を秘書氏を通じて知らされ、その段取りとなった。最初は小人数での座談のつもりが、会員の希望が強くて断り

日時 7月6日(日)午後6時より
場所 新潟市上大川前通五

参加者 西堀会長・同夫人 藤島 笠原 斎藤 室賀 小早川 井口 大味 山岸 山田 藤田 遠藤 望月 酒井 立川 荒木 本望 佐藤 鈴木 荒井 安野 高橋 永原 猪俣 安孫子 遠藤 藤田 増子 藤井 本宮 木下 上村 古沢 山崎 本田 笠原 森田 倉島 金山 山岸 加藤 加藤 阿部

80年ビールパーティ

婦人懇談会

九月五日(金)本会ルーム
午後六時三十分～八時三十分

- 31 J.D. Hooker "Himalayan Journal; or Note of a Naturalist" The Grand Colosseum Warehouse Co. (岡田喜一氏寄贈)
- 32 C. Schroeter "Der Pflanzen leben der Alpen" Verlag von Albert Raustein 1908 (岡田喜一氏寄贈)
- 33 N. Singh "Bhutan" Thomson Press 1978 (購入)
- 34 A.H. Francke "Ladakh" Cosmo Pub. 1978 (購入)
- 35 J. Butler "Travels in Assam" Vivek Pub. 1978 (購入)
- 36 M. Fantin "Sherpa・Himalay・Nepal" The English Book Store 1978 (購入)
- 37 F. Schmitt "Der Bergsteiger von Heute" Bergverlag Rudolf Rother 1937 (横川文雄氏寄贈)
- 38 Houston Mount Everest Expedition 1933 "Der Erste Flug über den Mount Everest" S. Fischer Verlag 1934 (横川文雄氏寄贈)
- 39 T. Hagen/G.O. Dyrenfurth "Mount Everest" Orell Füssli Verlag 1959 (横川文雄氏寄贈)
- 40 H. Kopp "Sechsmal über den Himalaya" Verlagsanstalt Hermann Klemm 1955 (横川文雄氏寄贈)
- 41 F. Younghusband "Der Himalaya Ruft" Union Deutsche Verlagsgesellschaft Berlin Roth Co. 1936 (横川文雄氏寄贈)
- 42 G.O. Dyrenfurth "Das Buch vom Kantsch" Nymphenburger Verlagshandlung 1955 (横川文雄氏寄贈)

とにかく天気が心配だった。朝から晴れしめた。係一同胸をなでおろしたことです。九十二名の参加者。盛会でした。先年度幹事宅間さんのアドバイスに従って、今年は生ビールの樽を前日から、二十貫余の氷で大切に守りしめたせいで、中川(公)さんの黒一点の御奮闘のたまもので一泡の具合も、冷たさも。併せて、係が密かにクーラーをつけたり止めたりして、皆さまの体温をビール向きに調整させて頂いておりました。「冷えてたヨ」のお言葉を頂く度に、係一同ニマリ。暑かった方々ゴメンナサイ……。

婦人懇談会の名物、手料理の数々！小原(晴)さんのちらしずし。宅間さんの味噌こんにゃく。係一同それぞれの傑作？がずらりと並んで食卓は仲々の賑わい。ビール券に描かれた「この一杯に思い出の山を透かして見る」ガルワルの山は佐藤(勉)さん作。皆さまのグラスにどんな山々が見えたでしょうか？もうひとつ、ホステス役のガルワルヒマラヤ登山隊員の美しい民族衣装も、当日の会場に花をそえたはずです。

最後に、開催前でしたが西堀会長の先導でルーム見学に来られた中国登山協会の方々に、私達の生ビールで乾杯して頂けたことは思いもかけない、大きな喜びでした。(早川 記)



会務報告

9月理事会

9月16日午後6時30分

本会ルーム

出席者 西堀会長、折井、渡辺各副会長、中島、飯野、中川、中村小倉、山口、高本、岡沢、嵯峨野高橋、菅沢各理事、小原(勉)、鴨原各監事、小原(晴)、大塚、村木金坂、山崎各評議員

委任 大森、越田、鈴木各理事

審議事項

▽シシヤパンマ(ゴザインタン) 日本女子登山隊の後援の件(折井)

女子登攀クラブの一九八一年プロ、中国側よりシシヤパンマ(八〇一二)登山に対して 承認

▽明治大学エベレスト登山隊の後援の件(折井)

一九八一年プロのネパール側よりエベレスト(八八四八)の登山に対して 承認

▽立教大学ヒマラヤ登山隊に対する推せん(中島)

一九八五年プロにネパール側よりエベレスト(八八四八)へ登山隊を派遣する。承認

▽日本大学理工学部ガネッシュ・ヒマール峰合同登山隊に対する推せん(中島)

一九八一年プロにネパールと合同でガネッシュ・ヒマール峰(七一三〇)へ登山隊を派遣する。承認

▽秩父宮記念学術賞候補の推せん(折井)

名古屋大学のネパールヒマラヤ水河学術調査隊(樋口敬二隊長)の調査報告を推せんする 承認

▽日韓合同高所医学と登山セミナー参加の件(折井)

韓国山岳会創立35周年記念事業として10月10日に京城で開催。本会より大森、長尾、住吉、斎藤、中島、広谷各ドクターが参加する

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

報告事項

▽山研委員会(高本)

夏の天候不順が影響してか、山研利用者が例年に比べ減少した。

▽山日記編集委員会(小倉)

編集は順調に進んでいる。12月上旬には出版できる予定。

▽海外連絡委員会(中川)

10月中にインドからサヒー氏、米国からシェーラクラフ、12月にソ連からパミール高原の村長が来日予定である。

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

了承

パミール山脈 (募集定員 10 名) 学術調査登山隊

- レーニン峰 (7,134m) 登頂
- 国際パミールキャンプ参加
- その他 5,000~6,000m 級登頂可能

=ソ連の山と旅の専門旅行社=

案内書呈 (株) 日ソ旅行社 政府登録一般第98号
 東京 404-1751(代) 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷 1-20-1
 担当: 石元 昭

ルーム日誌

(55年8月)

6日(水) 山研委員会
 18日(月) 学生部インドヒマラヤ登山隊壮行会

図書受入報告

図書委員会

昭和55年5～6月受入図書(つづき)

- 10 中島信一編「炉辺8号」明治大学体育会山岳部 昭55(版元寄贈・2冊)
- 11 西尾寿一編「溪谷6・特集奥只見の沢」西尾寿一 1980(編者寄贈)
- 12 島田・串田・山崎・近藤編「小島鳥水全集・第5巻」大修館書店 昭55(版元寄贈)
- 13 栗林一路著「中年からの山歩き入門」山と溪谷社 1980(版元寄贈)
- 14 三宅修・大森弘一郎著「空撮登山ガイド(北アルプス編)槍・燕・雲の平」山と溪谷社 1980(版元寄贈)
- 15 山下喜一郎・大森弘一郎著「空撮登山ガイド(北アルプス編)白馬・後立山連峰」山と溪谷社 1980(版元寄贈)
- 16 近藤等著「アルプスの空の下で」中央公論社 1980(版元寄贈)
- 17 スウェン・ヘディン著 ヨースタ・モンテル編 金子民雄訳「ヘディン素描画集」白水社 1980(版元寄贈)

- 18・19 スウェン・ヘディン著・水野勉訳「ヘディン探検紀行全集・別巻1・カラコルム探検史上/下」白水社 1980(版元寄贈)
- 20 武藤昭・岡田昇著「谷川岳の岩場」山と溪谷社 1980(版元寄贈)
- 21～24 蕨崎市誌編纂専門委員会編「蕨崎市誌上・中・下巻/資料編」蕨崎市役所 1978(版元寄贈)
- 25 「日本山岳会東九州支部創立記念誌」日本山岳会東九州支部 1980(版元寄贈)
- 26 北尾鯨之助著「山嶽巡礼」梅津書店 大正8(横川文雄氏寄贈)
- 27 鉄道省編「日本アルプス案内」博文館 大正14(横川文雄氏寄贈)
- 28 片野次雄写真「北アルプス」誠文堂新光社 1980(著者寄贈)
- 29 "Lehrbuch über des Rettungswesen" Schweizer Alpen-Club 1979 (Arnold Gubler 氏寄贈)
- 30 H.E.M. James "The Long White Mountain" Longmans, Green & Co. 1888(岡田喜一氏寄贈)

語句の正誤 会報42号3頁3段の
写真説明で広瀬氏(右)は広瀬氏
(左)、4段の「八十余年」は「八
十余歳」、また4頁3段の「登山
隊として」は「登山家として」、
「借景とした」は「借景とした」、
10頁
広告の「専門旅行社」は「専門旅
行社」の誤りです。お詫びして訂
正します。

昭和五十五年十月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十四

サンビュウハイム四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(261) 四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

19日(火) 常務理事会
21日(木) 科学研究委員会
22日(金) チョモランマ登山報
告会(私学会館)
28日(木) オデルル氏歓迎レセ
プション
29日(金) 講演と映画の夕(第
一生命ホール)
今月の来室者 24名
会員移動(8月)
退会
七八四九 前岡志郎
休会
六二二三 伊藤寿男
物故
三八五五 島 宏(8・11)